

「生きる力」と“PISA 型”能力

「生きる力」＝“zest for living”は、OECD の「キー・コンピテンシー」と同根

旺文社 教育情報センター 20 年 1 月

次期学習指導要領の基本的な考え方や教育課程の枠組みなどを審議している中教審は、現行学習指導要領の基盤をなす「生きる力」の育成を引き続き堅持するとしている。

他方、国際的な学力調査である「PISA 2006」の調査結果が 19 年 12 月に公表され、日本の高 1 生の「理数系応用力」や「読解力」の低迷、科学への興味・関心の低さなどが改めて問題視されている。この PISA 調査の概念枠組みの基本となっているのが、OECD（経済協力開発機構）の「キー・コンピテンシー」（主要能力）であり、「生きる力」と同根をなすものである。



<「生きる力」の育成>

中教審は、平成 8 年 7 月の第一次答申『21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について』において、当時の子どもたちの現状を「ゆとりのない生活を送り、社会性が不足し、自立が遅れている」と捉え、“ゆとり”の中で「生きる力」を育むことの重要性を提言した。

つまり、次のような資質や能力を「生きる力」と称し、変化の激しい社会の中でそれらをバランスよく育てていくことが重要であるとしている。

- いかにか社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力。
- 自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性。
- たくましく生きるための健康や体力。

この「生きる力」の理念は、いわゆる“ゆとり教育”の集大成ともいえる現行学習指導要領の基盤をなすものであるが、「生きる力」を支える「確かな学力」や学習意欲、学習習慣・生活習慣、体力などに課題があることが国内外の学力調査などで明らかになっている。

それは、「生きる力」について、学校や家庭、地域社会での共通理解がないまま、その理念を実現するための手立てが十分になされなかったためと考えられる。

<社会全体での取り組み>

中教審は学習指導要領の改訂に際し、まず、やるべきことは、「知識基盤社会」（後述）における激しい変化への対応を前提に、「生きる力」を育むことの必要性や、その内容を教育関係者や保護者、社会の間で共有することだとしている。

「生きる力」の育成は、学校だけに任せて済むものではない。家庭教育も重要な役割を担っており、地域社会も含めた様々な体験を通して、根付いていくものである。



<OECD の「キー・コンピテンシー」>

社会の営みは、かつての農業社会から産業社会へと移り、今や知識基盤社会の上に成り立っている。知識基盤社会では、新しい知識・情報・技術が政治、経済、文化など社会のあらゆる領域において活動の基盤となる。

グローバル化や高度情報化の進展、急速な技術革新といった知識基盤社会にあって、世界に共通する“能力”とは何か？

OECD は、共に生きる社会を育むための能力の国際標準を目ざし、「キー・コンピテンシー」(主要能力)という概念を提示している。このキー・コンピテンシーは、次のような3つのカテゴリーからなる。

- 社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力
(個人と社会との相互関係)
- 多様な社会グループにおける人間関係の形成能力
(自己と他者との相互関係)
- 自律的に行動する能力
(個人の自律性と主体性)

上記の3つの枠組みの中心にあるのは、個人が深く考え、行動することの必要性である。深く考えることには、目の前の状況に対して「既習した特定の定式や方法を反復、継続的に当てはめることができる力」だけではなく、「変化に対応する力」「経験から学ぶ力」「批判的な立場で考え、行動する力」が含まれる。

また、こうしたカテゴリーの背景には、次のような「変化」「複雑性」「相互依存」に特徴付けられる現代社会への対応の必要性があるという。

- ① テクノロジーが急速かつ継続的に変化しており、これを使いこなすためには、1回習得すれば終わりというものではなく、変化への適応力が必要となる。
- ② 社会は個人間の相互依存を深めつつ、より複雑化・個別化していることから、自らとは異なる文化等をもつ他者との接触が増大する。
- ③ グローバリズムは、新しい形の相互依存を創出する。人間の行動は、個人の属する地域や国をはるかに超え、例えば、経済競争や環境問題などに左右される。



<「生きる力」と「キー・コンピテンシー」>

前述の「キー・コンピテンシー」は、OECD が実施する「PISA」(生徒の学習到達度調査)の基本的な枠組みとなっている。“PISA 型”能力とは、知識の上に成り立つものであるが、それだけでは不十分で、細分化された知識や情報を「批判的思考力」(クリティカル・シンキング)などをもって統合し、複雑な課題に対処していく能力であるといえる。

また、行動する意欲や生きる意欲が学習力を育てていき、その学習成果は、自分自身の根源的な生き方や考え方、行動の仕方と繋がっていくともいえる。

こうした OECD の「キー・コンピテンシー」と学習指導要領の基盤をなす「生きる力」とを比べると、基本的には“同根”であるといえる。

<「生きる力」＝“zest for living”の評価>

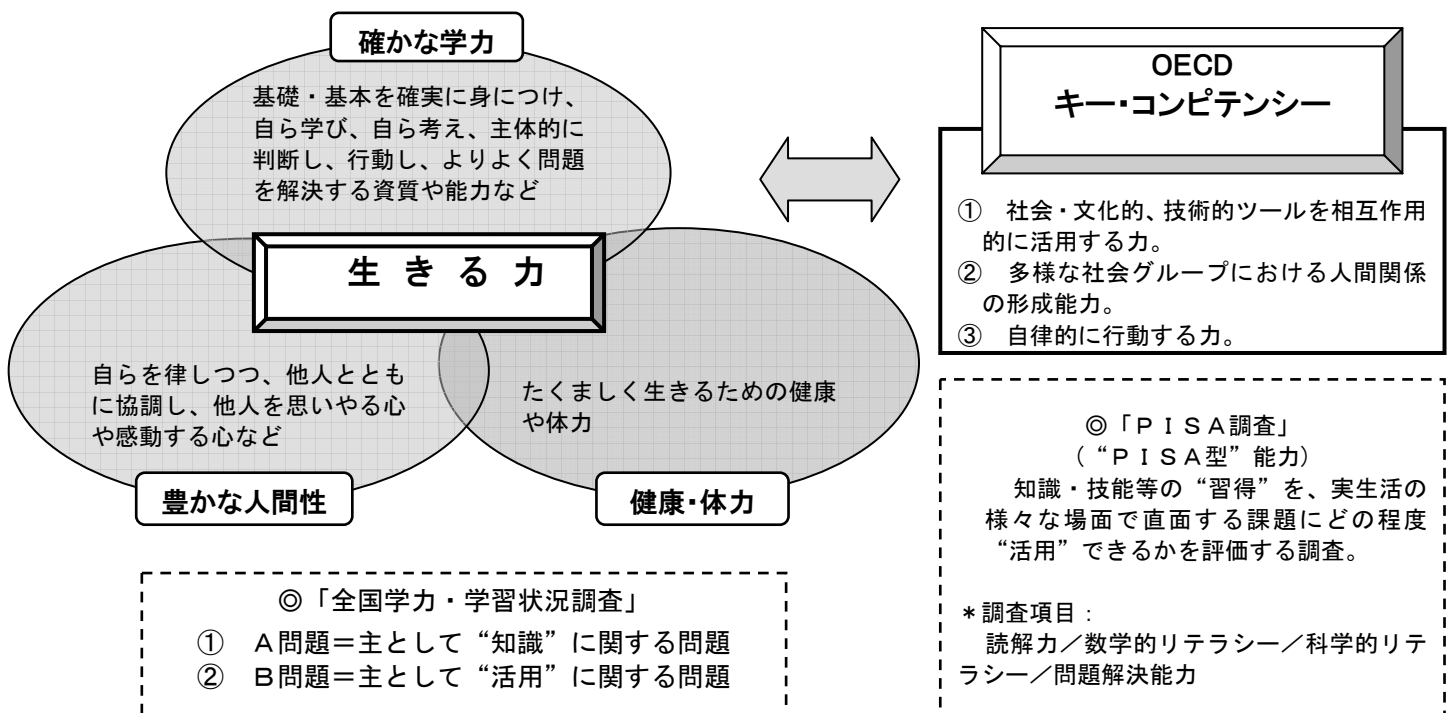
我が国のこれまでの学校教育は、知識・技能の習得が中心で、いわば平面的な評価観であった。

しかし、「生きる力」の育成を実効あるものとしていくためには、単に知識の多寡だけでなく、「自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する力」などを適切に評価し、指導していかななくてはならない。

昨春、全国の小学6年生(算数・国語)と中学3年生(数学・国語)のほぼ全員を対象に実施された「全国学力・学習状況調査」では、従来型の「主として“知識”に関する問題」(A問題)に加え、“PISA型”能力の評価観とも繋がる「主として“活用”に関する問題」(B問題)を取り入れている。

ところで、この「生きる力」、英訳は“zest for living”というようだ。powerではなく、zest というところに評価の難しさがある。ちなみに、「ゆとり」は“room to grow”とか。

●「生きる力」とOECD「キー・コンピテンシー」



(2008.01 大塚)